

抜群の適応能力と組織能力で発展してきた日本。
21世紀の国際社会のなかで、
日本には資本と技術の積極的なスピアウトが望まれる。



1948年、神奈川県生まれ。
77年東京大学大学院社会科学部研究科博士課程修了後、
無所属で、言語派社会学の樹立を目指し執筆活動を開始する。89年東京工業大学助教授。
主な著書に『冒険としての社会科学』『現代思想はいま何を考えればよいのか』
『民主主義は最高の政治制度である』他多数。

(はしづめ だいさぶろう)

橋爪大三郎

ポスト冷戦時代の日本は、 国際社会のリーダーシップを担えるか

日本人は、外国人の目にどう映るか？ これはもう、なんとナイーヴな奴らだろう、と見えるに決まっているわけです。ちよつと器用かもしれないが、およそ外国人と揉まれた経験がない。日本人は、そう言われても仕方のないお人好しです。

日本がちよつと島国であるあいだは、これでもよかった。でもいまや、二十世紀の後半、世界有数の資本主義大国にのし上がっているわけでしょう。ナイーヴな田舎まる出しではすまない。

どうして日本がここまで発展できたかと言うと、それは日本人の適応能力が高かったから。もともと日本人は、身の回りの品々に具合のわるいところがあると、なんとか改良して使い勝手をよくしようとすることに熱心だった。そんな江戸職人以来の伝統が、たとえば家電製品にも活かされて、ビデオなど世界中で売れているわけです。

日本人は、自分の感性を基準に、限界的な微小差異を発見し、それを商品化していく。感性は、ある程度人類共通なので、外国にも受け入れられる。これが、日本製品の国際競争力の秘密です。

この感性を、日本人は長い年月を

かけて育んできた。昔、中国から仏教や律令制度、文物を移入したたね。それを核に日本の国家としての骨組みを作り、天皇を中心に据えた。けれどもそれが、いつのまにか元の中国とは違ったものになっていき、武士が現れたり、封建社会を作ったりしました。外国のものを全部入れるわけではなく、日本人に合うものだけを取捨選択し、取り入れたあともデフォルメしてしまうのです。これは、明治以降の日本近代化のプロセスでも同じです。

よく考えてみると、日本文化の全体が、こうした作業の繰り返しにはかならない。外国の、もつとも新しいものを取り入れて、自分の感性に合うように改造する。そういう意味で、日本人は器用なのです。

しかしこの能力だけでは、戦後日本の発展はのぞめなかった。もうひとつ、日本人が独特の組織能力を持っていたことが、日本の成功を支えてきたと言える。

日本の社会原則は、とにかく人びとが「和」を保ちながら、一緒にいることを第一に考えること。キリスト教や儒教みたいな宗教規範が力を持たない日本では、人びとは、自分の所属する集団に対して強い帰属意

パンフレット企画 著名人アンケート

一橋祭ではパンフ企画として一橋大学または一橋祭に関係のある方にアンケートを実施しました。いずれも各界の一線でご活躍中の方々ですが、今回はそれぞれの専門分野とは関係なくプライベートに関する質問を並べてみました。それぞれの回答には非常に人柄がにじみ出ていると思いますので、是非お読みください。

1. あなたの座右の銘は？
2. あなたの尊敬する人物は？
3. あなたの宝物は？
4. あなたが最も嫌いなもの(こと)は？
5. もし、現在の職業についていなかったら？
6. もし、総理大臣になったら何をしますか？
7. おすすめの本を3冊紹介してください(作者と題名のみ)
8. 若い頃の失敗談を聞かせてください
9. 学生時代の思い出を聞かせてください

橋爪 大三郎氏 (東京工業大学)

1. 特になし
2. その時々尊敬する友人を持っている
3. 特になし
4. こういうアンケートに答えるのは「最も」ではないが「かなり」嫌いだ。
5. やっぱり本を書いていただろう。
6. 非現実的な仮定では、答えようがない。
7. すべての人に共通に進めたい本はない。
8. 特になし
9. よく考えてみると、学校にはあまりよい思い出はない。

「なるほど」の力学

橋爪大三郎

「厚生紙を使用しています」とわざわざ印刷してある名前をもらったもののような居心地悪さを感じさせたら、環境広布は失敗だ。

紙の拒む母親と赤ん坊。山奥のうつそうとした森。スクラップ自動車の山。それだけが映し出されると、何かメッセージがあるはずだ、と人は思う。それで、メルセデス・ベンツ。なるほど、と人はうなずく。

—のではあるが、その力学はかなり微妙だ。単純な映像ほど、文脈次第で全く異なる。川柳風じや川流

企業と思われたのでは、単なる「くさい」広告になってしまう。

こういう広告を打てる会社は、だから、そのくんの力学も研究してG.O.サインを出した(＝自信があった)という意味になる。そんなメタ・メッセージも伝わるから、さすがベンツの感が強まる。これはバブルの構造と同じだ。あとはやることをやって、広告に恥じない会社であるための努力の日々が続くのみ。これもベンツらしい、と言っておこう。

識と忠誠心を持ち、自分を犠牲にしてもその集団と感性的に一体化をはかることをよしとする。そのため、日本の生産組織は企業は、世界でも有数の競争力あるシステムを作り上げることができた。これが、日本株式会社です。

戦後日本の成功は、これ以外に、二、三の幸運にも助けられていた。

第一の幸運は、第二次大戦のあとに大きな戦争もなく、平和が続いたこと。このパクス・アメリカナのおかげで、資源のない日本が世界中から物資を輸入することができた。第二は、アメリカと同盟関係を結べたこと。日本は防衛の肩代わりをしてもらい、食糧や資源・資本・技術の提供を受け、広大な市場まで手に入れるという願ってもない幸運を享受できた。第三に、小国だったこと。貿易（国際分業）から得られる利益は、小国ほど大きいのです（貿易の利益の定理）。

こうして順調な発展が続いているうちに、日本人はこれを当たり前と思うようになった。日本人が勤勉に働き、よい製品を作っているのだから、繁栄するのは当たり前だと思いはじめました。でも、日本人の気づかないうちに、日本の繁栄の前提は変化しつつある。しかも、日本経済が

発展すればするほど、その足許が脅かされるという、実に危殆な状況にあります。日本人はこのことを、よく理解しないといけません。

本当の文明の意味

日本の資本主義は、それがうみだす製品からみれば世界性を有しているが、その組織実態からみればきわめて排他的です。

日本企業は、日本流の組織原則で運営されている。その組織に加われるのは事実上、日本で正規の学校教育を受けた人間だけで、日本人以外の人びとの参入はむずかしい（と言ふより、ほとんど期待できない）。多くの場合、外国人が組織のメンバーである可能性など、はじめから予想されていないのです。

さつきも言ったように、日本の技術開発、商品開発の決め手は、組織力にある。自分の所属する組織に強い忠誠心を持つ人びとが集まり、暗黙のうちに人びとの感性の同調をはかりながら、企業の効率や活力がうみだされているわけだから、その過程で異端分子になりそうな外の人間は、なるべくいないほうがいい。こういう必然的な圧力が働くのが、日本企業の排他性です。

日本以外の国、たとえばアメリカ

したいというのが、アメリカの本音でしょう。

日本とアメリカが、今後ますます結びつきを強めていくこと。それは国際関係の安定にとって、当然プラスとなるでしょう。しかし日本が、相変わらずアメリカの眼鏡を通してしか世界を見られないとすれば、それは困ったことだ。なぜなら、日本もアメリカも、経済的な豊かさを既得権として享受しているのに、その二国の結びつきには、不均等を解消する熱意が期待できないから。

そこで日本としては、アメリカと独立に、あるべき世界のあり方（不均等の是正）について、しっかりとイメージ（世界戦略）を掲げなければなりません（「戦略」と言っても軍事的な意味でなく、不均等を是正していくための具体策という意味です）。

日本にはさういらい、戦後の経済成長を通じて蓄積してきた、膨大な資本と技術がある。技術の特徴は、移転しても減らないことです。資本は財（または貨幣）なので、移転すると減ってしまう。だから限度があるけれど、それでも、組織力、技術力という意味での資本ならほとんど移転できる。そうやって、すべての開発途上国の発展のために、資本と技

やヨーロッパの国々や、インド、中国、旧ソ連の国々などをみると、みな多民族社会です。そうした社会では、キリスト教やイスラム教といった普遍的価値観を共通の拠りどころとしながら、さまざまな文化を持つ多くの民族がひしめきあって暮らしている。こういう社会で生きていると、相手が異なった文化を持っているとしても、共通の接点を探っていくようにする訓練ができていくのです。相手の文化もそれなりに尊重しないと、自分の文化も尊重してもらえない。だから、人びとの間の差異を処理する技術が、社会や組織のルールのなかに織り込まれて、根づいている。日本の組織にみられるみだいな排他性はない。

ところが日本人は、基本的に単一民族として暮らしてきたため、文化の異なる他人を受け入れる訓練ができていない。当然のことだが、人びとの間の差異を処理する、社会的なルールも形成されていない。裁判も宗教も、発達しなかった。腹を割って話しあえば、なんとかなる。つまり、どんな他人もきつと自分と同じに違いないし、同じであるべきだ。

——こういう前提で、人間関係も組織もでき上がっているわけです。

文明とは、民族や文化の異なる人

術の積極的なスピノフをはかるのが、日本の基本戦略ということになるでしょう。

技術が高くなれば、資源を有効に利用でき、同じ労働をしても所得が高くなる。技術移転は誰にとっても喜ばしい結果をもたらします。しかもうまいことに、日本が抱える貿易黒字も、減らしてくれる。

技術を移転し続けるには、日本もどうかしてはじめて、新技術・先端技術の開発を続けていく必要がある。そのために、中国や東南アジア、インドなどから優れた若手の科学技術者を日本にまねき、研究コストを負担して、日本の基礎研究を充実していくべきだ。世界中の人びとに助けてもらって、日本を科学技術のメッカにし、それを世界に還元する。

これもまた、国際貢献のあり方です。これは一例ですが、こうしたアイデアをちやくちやくと実行していけば、やがて世界もわかってくれるだろう。「顔が見えない」「責任を負いたがらない」「自分勝手」などと言う、日本人に対するかすかすの不評も、少しずつ打ち消していくことができるはずだ。

まず専門家が先頭に

こういったことは、一朝一夕には

びとが集まって、互いに多様性や独自性を残したまま作り上げる社会のこと。ローマも中国も、キリスト教やイスラム教の文明もそうだった。これと比べると日本は、資本主義経済に適応し、物質文明の恩恵に浴しているものの、じつはまだまだ本當の文明の何たるかを知らない、と言える。外国人が日本人をみるとんでもなくナイーブに見えてしまうというのは、こういう理由です。

資本・技術のスピノアウト

あと七年で、二十一世紀。地球はますます狭くなり、地球全体が一個の文明を形成できるかどうか問われている。世界各国は協力して、国際社会の秩序やルールを支えあい、その共通の目的に向かって、厳しい道を進もうとしているわけです。

こんな状況のなか、日本人だけがのほほんと、そうした厳しさと無縁に日を送っているはずがない。日本だけが国際社会と違ったルールで社会を運営し、ひとりだけ繁栄を享受していれば、世界各国の苛立ちをののらせ、どうしようもなく孤立してしまします。

そんな事態を防ぐには、まず日本人が、自分たちの文化や行動様式をよく自覚して、それを外国の人びと

実現しません。しかし、それが難しいことを政治家の無能のせいにして、ラチがあきません。

政治家を動かすのは、国民です。しかし国民は、日々の生活に忙しいのだから、まずジャーナリスト、学者、科学者、宗教家、法律家といった人びとが先頭に立って発言すべきだ。日本人だけの利害にとらわれずに、国際社会のルールに従った発言や行動を身をもって示すべきです。専門家はもとより、人類共通の真理や価値を追究するのが使命なのだから、こずする義務があるのです。

専門家が、国際的なルールにのっとって、上役や年長者を恐れず堂々と発言し、自分の考えを明らかにするなら、それだけで「いろいろな日本人がいるんだなあ」「いろいろな意見があつていいんだ」と人びとが思い始める。そうすれば日本人のあいだにも、多様性が広がっていくだろう。五十五年体制が崩れ、やっとな国全てもさまざまな議論をたたかわせる条件がととのってきた。これは日本人にとって、いいチャンスです。この機会をとらえて、一人ひとりが自分を国際規格の人間にしていこう。これがいい、日本の国益と世界の利益に、もつともかなったことなのです。